

現代ロシア語における 「定性」／「不定性」の表現について

柳 町 裕 子

0

ここで扱う「定性」／「不定性」(определенность-неопределенность)とは、実際の発話やテキストで問題となる(冠詞システムを持つ言語では冠詞類でマークされている)名詞句の意味である。「定性」／「不定性」と言い表すことのできる名詞句の意味は、冠詞システムを持たないロシア語においてもその幾つかの文法形式の用法を説明する要因としてしばしば利用されている。「定性」／「不定性」とは、基本的には、名詞句の表す対象がそれが参加するコンテキストにおいて「特定できる」か(名詞句が「定性」を担っている場合)、あるいはできないか(名詞句が「不定」である場合)という区別に関わる意味、と言えるものであるが、実際のその言語表現においてはこのような単純な二項対立だけでは捉えきれない様々な意味区別も関わってくるものである。この「定性」／「不定性」のより具体的な意味内容をどのようなものとするか、それをどのように定義するのか、という点に関しては文献間でいろいろ食い違いがみられ、この問題はまだまだ議論の余地を残すところとなっている。そして、その意味内容の考察のために、冠詞類以外の手段によるこの意味の表現についての考察が重要なテーマのひとつとなっているのである。⁽¹⁾

本稿では、冠詞システムを持たないロシア語では名詞句の「定性」／「不定性」はそもそもどのように表現されているのか、という点の確認をすすめながら、ロシア語の文法にあっては、この「定性」／「不定性」の意味の考慮がどのようなところで、また具体的にはどのような意味内容を持つものとして重要になっていると言えるのか、という点を考えてみたい。

1

冠詞システムが発達しなかったロシア語では、「定性」／「不定性」の意味自体の文法化は進まず、その意味に関わっていた別の文法カテゴリーがその意味との関係を様々に残しながら発達してきた、ということが(特に動詞の体と形

容詞の語尾の問題に関連して) 言われている。また, そのような文法カテゴリーへの「定性」/「不定性」の意味の関与の仕方が通時的に「ゆれ」の激しいものであることも指摘されている。現代ロシア語においてその「ゆれ」のあり方を顕著にあらわしているもののひとつと言えるのが, 否定他動詞文の目的語における生格と対格の使い分けである。この用法においては, もともと「定性」/「不定性」の意味に関しては「無標」であると言える生格用法に対して, 目的語となる名詞句が「定性」を担っている場合には対格が用いられるという強い傾向が認められていた。けれども, より最近の研究資料にあつては, 「定性」の意味とは無関係の対格用法が増えてきていることが指摘されている。このような(主に対格用法の増加により起こっていると考えられる)「ゆれ」は, *ждать, просить, искать* の類の動詞の目的語における生格と対格の用法にもみることができるわけであるが, この場合そのあり方(用法への「定性」/「不定性」の意味の関与の程度)は, またその上に, 個々の動詞ごとにも違って観察できるものとなっている。これらの生格/対格用法に「定性」/「不定性」の意味が関わっていることは確かであるが, しかしまた, それがこれらの用法の一次的要因とは言い切れないことも確かである。むしろ, 「定性」/「不定性」の意味はこれらの用法に言わば「傾向」として深く関わってくる二次的な要因である, と考えるべきものであろう。⁽²⁾⁽³⁾ このことはロシア語において「定性」/「不定性」が関わっているとされる他の現象にも共通して言えることである。

2

現代ロシア語において「定性」/「不定性」が関わっていると指摘されている現象としては, 語順, 代名詞類の意味と用法, 幾つかの構文における生格/対格, あるいは生格/主格の使い分け, 形容詞の語尾の用法, そして, 名詞の「数」の用法などを挙げることができる。これらの諸現象における「定性」/「不定性」の関与の仕方をそれぞれ検討してみると, ロシア語における「定性」/「不定性」表現の次のような全体的特徴がみえてくる。

まず, それぞれのレベルにおいて「定性」/「不定性」の意味の関わり方における偏り, あるいは傾向と言えるものが確認できる。

名詞句自体の意味においては, 「定性」/「不定性」のマークのされ方において極端な偏りを示すタイプのもものが認められる。何よりそれが顕著なのは, 「不定」のものとしてマークされやすい「物質名詞」が表す対象に代表される

ような「量的」性質を持つ対象である。具象名詞の複数形の表す対象も同じ意味タイプに含めて考えることができる。このような意味タイプに分類される名詞句は、例えば否定他動詞文の目的語の位置においては、統計的にみて圧倒的に生格が選ばれやすい、と言われているものである。⁽⁴⁾同様に、「存在」を表す述語の否定形に対しても通常生格形でたつことになる。⁽⁵⁾また、肯定文においても、その対象の「授受」や「存在」に関係する意味タイプの述語に対してはその「不定性」が（生格用法によって）マークされることがある。⁽⁶⁾この「物質名詞類」としてまとめることができるタイプの名詞句が表す「不定性」はしばしば「不定量性」と言い表されるものであるが、それはつまり、対象の「全体量」がとらえられていないこと、それを「ひとつの全体」を成している対象としてみていないこと、を示しているものであり、この意味で「物質名詞」と具象名詞の複数形の表す対象の性質が共通している、と言えるものである。故にそれは「非全体性」と言い換えた方が良いであろう。⁽⁷⁾

文における意味・統語的位置も「定性」／「不定性」の読みの傾向に関係している。主語の位置にある名詞句は「定性」を担っていると読まれやすい。取り分け動作主を意味する主語と受動形容詞短語尾形の主語がそうである。（そのため、このようなタイプ的主語が何らかの意味で「不定」の場合には通常不定代名詞類の限定が必要になる。）⁽⁸⁾また、形容詞の用法に関しては、長語尾形述語に対する主語は「定性」を担っていると読まれやすい、という強い傾向を認めることができる。⁽⁹⁾

テーマ／レーマの構造も「定性」／「不定性」の意味区別に関係してくるが、テーマの位置で「定性」／レーマの位置で「不定性」という対立をある程度規則的に認めることができるのは主語の位置にある名詞句に限られている。⁽¹⁰⁾

ロシア語では名詞句の「定性」／「不定性」のマークは義務的でないので、名詞句が文で担うべき「定性」／「不定性」の意味がこれらの要因による「定性」／「不定性」の意味解釈への「傾向」と食い違わず、且つ、コンテクストによる推測によって可能な限りは、その名詞句の「定性」／「不定性」は原則として代名詞類ではマークされないまま置かれることになる。このことは冠詞システムを持たない言語に共通して確認できることであるが、ロシア語における代名詞類の用法範囲はその中でもかなり狭い方であることが予想できる。⁽¹¹⁾

このような、レベル毎に、あるいはその兼ね合いから認めることのできる「定性」／「不定性」解釈における「傾向」とある文法形式の用法——これらの間の相関関係はその用法への「定性」／「不定性」の意味の関わり方を知る

ための重要な目安である。けれども、より興味を引くのは基盤となる前者の「定性」／「不定性」における「傾向」に後者（つまり文法形式の用法）が逆らう場合である。例えば、否定他動詞文の目的語の用法において「物質名詞類」の名詞句が対格形で用いられている場合、それは普通「定性」を担っているものと読まれることになる。（生格形で用いられている場合には「不定」のものと読まれることになる。）⁽¹²⁾

(1) Почему ты не выпил молоко, (которое я тебе оставила)?

「何故（私があなたに残しておいたその）牛乳を飲まなかったの？」

もし、この例の場合のように、それぞれの文法形式の用法（使い分け）にあつて「定性」／「不定性」の意味区別の読み取りが重要になる場合のみを（その用法における単なる「傾向」ではなく）その用法による「定性」／「不定性」の「表現」として認めるならば、ロシア語における「定性」／「不定性」の表現に関しては、それが可能となるような（名詞句の意味タイプの制限などの）一定の条件をいつも考えなければならないことがわかる。特に問題となる条件は、上に挙げたような各レベルにみることのできる「定性」／「不定性」どちらかへの解釈における極端な偏りである。

また、このようなことを踏まえてロシア語において「定性」「不定性」表現と認められる用法を集めて検討してみると、⁽¹³⁾「定性」表現と「不定性」表現とはそれぞれの性格が異なっていることがわかる。例えば、上の(1)の例は「定性」表現の例としてよく挙げられるものであるが、この「定性」の解釈の判断は最終的にはコンテキストに依らなければならないものである。別のコンテキストにおいては同じ「物質名詞」に対する対格用法が「類」を表すこともあるからである。⁽¹⁴⁾

(2) Она не пила молоко совершенно в детстве.

「彼女は子供の頃牛乳（というもの）を全く飲まなかった」

ロシア語での「定性」表現は、（代名詞表現を除いては、）このように最終的にはコンテキストに任される場合が多いと言えるものである。一方、「不定性」表現には代名詞表現以外にも積極的なタイプのものをみることができるとも、また、「定性」表現の意味内容は「コンテキストで特定できること」を示しているものとして皆一様に考えることができるとしても、「不定性」表現の意味内容に関しては、それを単に「そうでないこと」を示しているものとして一様に片づけることはできない。その表現方法によって異なるいろいろなタイプの「不定性」の意味内容をみることができるのである。⁽¹⁵⁾ ロシア語におけるこのような

「不定性」表現の性格を教えてくれるひとつのケースが名詞の「数」の用法による表現である。

3

名詞の「数」の用法による「不定性」表現としてよく問題にされるのは次の(3)と(4)の例におけるような複数形による表現である。

(3) В вагоне у нас новые пассажиры: молодая женщина с чемоданом.

「私たちの車両に新しい乗客がいる（乗ってきた。）スーツケースを持った若い女性だ。」

(4) У нас гости: вернулась Маша.

「うちに客が来ている。マーシャがもどってきたのだ。」

これは、コンテキストで示されている実際の対象の数量（この場合「一人」）と食い違うタイプの「複数形」用法のひとつで、「人間」を表す名詞句に限って可能となる口語体によくみられる表現である。

このタイプの「複数形」による「不定性」表現に関しては、それが使われる構文の意味やコンテキストにみられる偏りから説明することができる。このタイプの「複数形」用法がよくみられるのは広い意味で「存在」の意味を表す構文であり、そして、話者が自分は「特定できるある人」を聞き手に提示するような所謂「イントロダクション」のコンテキストである。

実際、次の(5)(6)の例にみるように、「存在の陳述、確認、否定」に文の意味の焦点がある場合には実際の対象の数には関係なく「複数形」を用いる方が自然な表現となる。

(5) Есть ли у нее знакомые? — У нее нет знакомых.

「『彼女には知り合いがいますか』『彼女には知り合いはいません』」

(6) Берегитесь, там змеи!

「気をつけて、そこに蛇がいますよ（見つけた蛇が一匹である場合もあり得る）」

「存在」する対象が「人間」を意味する場合には「複数形」用法がより好まれる。例えば、次の(7)と(8)の例において、「複数形」が用いられている(7)の例の方は(5)(6)のタイプに相当する表現であり、「こんな問題が解ける人もいる」という、それに該当する人の「存在」について一般的に語っていると解釈できるものである。この場合、話者の念頭に「特定の（複数の）人」がいるかどうかは問題でない。一方、「単数形」が用いられている(8)の例は、「この問題を

解けるある人がいる」と解釈できるような、つまり、話者が自分には「特定されているある一人の人」を問題にしている、と解されやすい表現である。つまり、単数形が用いられている場合には、名詞句の表す対象がそれが属するクラスから既に取り出されている（すなわち「個別化」されている）ものとして提示されているようにとられる傾向が認められるのである。

(7) Есть люди, которые могут решить такую задачу.

(8) Есть человек, который может решить такую задачу.

「人間」を表す名詞句の「存在文」における単数形表現が有するこのような「個別化」への傾向は「イントロダクション」のコンテキストではよりはっきり現れることになる。但し、ここで重要なのは、「単数形」か「複数形」か（つまり、「一人か否か」という区別ではなく、話者が問題としている対象の「全体量」が示されているか否かの区別である。

(9) Есть у нас в институте (один) профессор.

(10) Жили три брата.

この(9)(10)の例における表現のように、「イントロダクション」のコンテキストでは、もし話に持ち出されている対象が複数の場合にはその「数量」を示す数詞を伴うのが自然な表現である。そしてこの場合、聞き手の前には、(コミュニケーションレベルの意味では聞き手にとって「既知」の対象であるとは言えないものであるが、) その「全体量」が特定されていることで少なくとも「個別化」されている対象が提示されることになる。単数形であれば(ОДИНの限定が省かれていても)普通「一個」の対象として「個別化」されることになる。

(3)(4)におけるような「複数形」による「不定性」表現は、「イントロダクション」のコンテキストが有するこのような「個別化」を促す傾向を背景にしたものであると考えることができる。すなわちこの用法は、数詞を伴わない「複数形」によってその対象の「全体量」が特定されていないことを表しているわけであり、そしてそれによってその対象が「個別化」されていないことを(あるいはそれを問題にしていないことを)示している表現である。文全体の意味としては、これは起こった出来事の方に焦点をあてている表現、と言えるだろう。⁽¹⁰⁾

このように、「複数形」による「不定性」表現も、構文の意味、名詞句の意味などの一定の条件の組み合わせを考えなければならないタイプのものである。そして、これは「特定できるか/否か」という区別ではなくて、「不定性」の「段階」に関わる表現であることがわかる。また、この「複数形」による「不

定性」表現に関わってくる指標もある意味で「非全体性」と言い表すことのできるタイプのものである。

4

以上のような性格を有するロシア語の「定性」／「不定性」表現を考えるためには、「定性」／「不定性」の具体的な意味内容については次のように考える必要がある。まず、「定性」と「不定性」とは、「定性か否か」というプラスマイナス的な一対の対立から構成される概念ではなく、それは「典型的」な「定性」からだんだんそうでないタイプのものが並べられる「段階」構造を成すものとして捉えられるべきものである。「不定性」とは確かに「定性」を担っていない状態のことであるが、それは「定性」に対立する概念というよりむしろ、「定性」を担うための「条件」がそろっていない状態のことであると言える。「定性」の条件としては、(すなわち、それは聞き手が話者の念頭にある対象を特定するために必要な条件と言えるものであるが、) 少なくとも次のふたつのことが挙げられる。コンテキストによる情報でその対象が「特定できる」こと(コミュニケーションレベルの条件)と、その対象の「全体量」が示されていること、あるいはそれが「ひとつの全体」を成すものとして示されていること(認識のレベルに関わる条件)である。「不定性」とはつまり、それを表現する手段の意味特徴によってこのような「定性」を満たす条件の何らかの面が欠けていることが示されていることであり、従って、その表現手段のそれぞれの意味特徴に応じて「不定性」のいろいろなタイプやその程度が区別できるものである。

ロシア語では、認識のレベルに関わる意味区別の方が(特に「全体性／非全体性」という指標が)本質的なものとなっていて、コミュニケーションレベルに関わる意味区別はその区別に従属するかたちで、言い換えれば、それを「利用する」かたちで実現されていると言うことができる。

ロシア語における「定性」／「不定性」の意味は超カテゴリー的意味である。それは文法的に表されることはなく、その意味表現はいろいろなレベルのいろいろな文法カテゴリーによって、そして多くの場合その組み合わせによって実現されているわけである。けれども、その表現はまったく恣意的なわけではなく、それは、各レベル、各文法カテゴリーにそれぞれ認めることのできる「定性」／「不定性」の意味との関係のあり方、その一定の「傾向」に条件づけられているものである。ロシア語文法においてこの「定性」／「不定性」の意味

の考慮が特に有意義であると思われるのは、発話（文）レベルで実現されるようなそれぞれの文法カテゴリーの臨時的用法や、あるいはいろいろなカテゴリー間の関係（体の用法と数の用法、格の用法など）の解釈の際であろう。そのなかでも特にこの「定性」／「不定性」の意味を考慮しての見直しが必要だと思われるのは、名詞の「数」の用法と、その用法と他の文法カテゴリーとの関係である。

- 注(1) 冠詞言語ばかりでなく無冠詞言語における「定性」／「不定性」の意味内容、あるいはその表現について検討している文献 → Гак 1975, Дэже 1973, Николаева 1979, Ревзин 1973, 1977, 1978: 133 ff., Chesterman 1991, Christian 1961, Givón 1978, Gladrow 1979, Raskin 1980.
- (2) 現代語における否定他動詞文の目的語の生格／対格用法の問題を扱っている研究のなかで、特にこの用法と「定性」／「不定性」の意味の関わりを検討しているのは → АГ 1980: 415 ff., Граудина и др. 1976: 35-38, Ицкович 1982: 37-50, Красильникова 1990: 53-56, Davison 1967, Gladrow 1979: 165-169, Jakobson 1936, Restan 1960, Schaller 1978, Thomson 1911/12, Timberlake 1975, Wexler 1976.
- (3) ждать タイプの動詞の目的語の用法、及び全体的な対格用法増加の問題に関しては → Горбачевич 1976, Граудина и др. 1976: 33-34, Ицкович 1982: 26 ff., Timberlake 1975.
- (4) 注(2)の文献を参照。
- (5) 参照 → Граудина и др. 1976: 38, Ицкович 1982: 50-52.
- (6) これは、実質的量の授受に関係する動詞 дать, прислать, брать, добыть, достать, собрать, получить, купить, съесть, выпить. 等の目的語となる場合 (→ Дай мне молока. Дай мне денег.) や、実質的量の状態に関係する自動詞 прибавиться, накопиться, остаться, убыть 等に対する主体の位置にある場合 (→ Хлеба еще осталось. Яблок валяется!) である。
- (7) 「不定性」の指標のひとつとしての「非全体性」について検討している文献 → Красильникова 1983, Ревзин 1969: 108, Chesterman 1991: 154-161.
- (8) 主語の位置にある名詞句の「定性」の読みへの「傾向」、及び代名詞の用法に関しては → Головачева 1979, Николаева 1983: 343, Падучева 1985: 158 ff.
- (9) 現代語における形容詞の語尾と「定性」／「不定性」の関係に関する文献 → Всеволодова 1972: 62, Ермакова 1974, Падучева 1985: 106.
- (10) 全体的にみて、ロシア語において「定性」／「不定性」の意味区別がより問題になるのは (つまりそれがより敏感になされるのは) 主語の位置にある名詞句である。参照 → Арутюнова 1976, Ревзин 1977: 223-225, Адамец 1985: 487-491, Бельский 1956, Гак 1975: 35-37, Крушельницкая 1956, Поспелов 1970. 特にテーマ／レマの構造と「定性」／「不定性」の意味との関係に関して詳しい

のは後ろの5文献である。

- (11) 定冠詞は指示代名詞から発達してきたものが多い。指示代名詞の用法範囲に関する「指示性の弱化」の程度（及び、それに伴う「冠詞度」、すなわち、定冠詞の意味範囲のうちどの程度まで表せるか、という程度）はロシア語はかなり低い方である。参照 → Адамец: 1985, Головачева 1979, Ревзин 1973: 121-129, Krámský 1972: 187 ff.
- (12) このような生格用法に対する対格用法（あるいは主格用法）において「定性」の意味の読みが重要になるのは、否定文という（つまり、「物質名詞類」が生格用法への強い傾向をあらわす）環境だけである。（注(13)の(a)と(b)の例も参照。）注(6)に示したような肯定文における生格用法にはそのような強い傾向は（現代語においては）なく、そのためそれに対する対格用法（あるいは主格用法）における「定性」の読みの必然性は認められない。参照 → Граудина и др. 1976: 34, Ицкович 1982: 26-29, Gladrow 1979: 153-165.
- (13) この意味で「定性」表現と認められるその他の主なケース。
- (a) Птицы больше не появлялись. 「その鳥達はもう現れなかった」
 (cf. → Птиц больше не появлялось. (「鳥はもう現れなかった」)
- (b) Ни один грош не был у меня в кармане. 「ポケットにはそのグロシ硬貨のうちのひとつもない」
 (cf. → Ни одного гроша не было у меня в кармане. 「ポケットには一文もない」)
- (14) 参照 → Красильникова 1990: 55, Падучева 1985: 106-107, Thomson 1911/12: 256.
- (15) 例えば、不定代名詞の表すいろいろな「不定性」の意味内容について詳しい文献 → Гак 1975: 39 ff., Николаева 1983, Падучева 1985: 209ff., Christian 1961.
- (16) この「複数形」による「不定性」表現のその他の解釈については → Арбатский 1972, Колесников 1988: 65-66, Красильникова 1983, Ревзин 1969, Русский язык и~1968: 153 ff. 「存在」の意味と「数」の用法の関係について詳しい文献 → Князев 1979: 280, Красильникова 1990: 77 ff., Лебедева 1988: 23-24.

主な参考文献

- АГ. 1980. Русская грамматика, т. 2. Синтаксис. М., Наука.
- Адамец, П. 1985. К вопросу о выражении референциальной соотнесенности в чешском и русском языках. (Перевод с чешского Н. А. Кондрашова.) В кн.: Новое в зарубежной лингвистике. вып. 15, с. 487-497. М., Прогресс.
- Арбатский, Д. И. 1972. Множественное число гиперболическое. Русский язык в школе. 1972. № 5, с. 91-96.
- Арутюнова, Н. Д. 1976. Референция имени и структура предложения. Вопросы языкознания. 1976. № 2, с. 24-35.

- Бельский, А. В. 1956. Интонация как средство детерминирования и преципирования в русском литературном языке. В кн.: Исследования по синтаксису русского литературного языка, с. 188–199. М., АН СССР.
- Всеволодова, М. В. 1972. Употребление полных и кратких прилагательных. (2). Русский язык за рубежом. 1972. № 1, с. 59–64.
- Гак, В. Г. 1975. Русский язык в сопоставлении с французским. М., Русский язык.
- Головачева, А. В. 1979. Идентификация и индивидуализация в анафорических структурах. В кн.: Категория определенности-неопределенности в славянских и балканских языках, с. 175–203. М., Наука.
- Горбачевич, К. С. 1976. О распространении конструкций с винительным падежом в современном русском языке. Русский язык в школе. 1976. № 6, с. 19–24.
- Граудина, Л. К., Ицкович, В. А., Катлинская, Л. П. 1976. Грамматическая правильность русской речи. М., Наука.
- Дэже, Л. 1973. Вопросы общей и славянской синтаксической типологии. Studia Slavica. (19), с. 1–16.
- Ермакова, О. П. 1974. О взаимообусловленности форм подлежащего и сказуемого в современном русском языке. В кн.: Синтаксис и норма, с. 220–234. М., Наука.
- Ицкович, В. А. 1982. Очерки синтаксической нормы. М., Наука.
- Князев, Ю. П. 1979. Нейтрализация морфологических противопоставлений в ряду смежных явлений грамматики. В кн.: Категория определенности-неопределенности в славянских и балканских языках, с. 268–288. М., Наука.
- Колесников, А. А. 1988. Семантическое обеспечение грамматических форм имен существительных русского языка. Киев, Выща школа.
- Красильникова, Е. В. 1983. Некоторые проблемы изучения морфологии русской разговорной речи. В кн.: Проблемы структурной лингвистики. 1981, с. 107–120. М., Наука.
- 1990. Имя существительное в русской разговорной речи. Функциональный аспект. М., Наука.
- Крушельницкая, К. Г. 1956. К вопросу о смысловом членении предложения. Вопросы языкознания. 1956. № 5, с. 55–67.
- Лебедева, Л. Б. 1988. Особенности употребления форм единственного и множественного числа в общих высказываниях. Научно-техническая информация. 1988. Сер. 2. № 7, с. 18–25.
- Николаева, Т. М. 1979. Введение. В кн.: Категория определенности-неопределенности в славянских и балканских языках, с. 3–10. М., Наука.

- 1983. Функциональная нагрузка неопределенных местоимений в русском языке и типология ситуаций. Серия литературы и языка. т. 42. № 4, 342–353.
- Падучева, Е. В. 1985. Высказывание и его соотнесенность с действительностью. (Референциальные аспекты семантики местоимений). М. Наука.
- Поспелов, Н. С. 1970. О синтаксическом выражении категории определенности-неопределенности в современном русском языке. В кн.: Исследования по современному русскому языку, с. 182–189. М., МГУ.
- Ревзин, И. И. 1969. Так называемое «немаркированное множественное число» в современном русском языке. Вопросы языкознания. 1969. № 3, с. 102–109.
- 1973. Некоторые средства выражения противопоставления по определенности в современном русском языке. В кн.: Проблемы грамматического моделирования, с. 121–137. М., Наука.
- 1977. Анкета по категории определенности-неопределенности. В кн.: Балканский лингвистический сборник, с. 220–242. М., Наука.
- 1978. Структура языка как моделирующей системы. М., Наука.
- Русский язык и советское общество. Морфология и синтаксис современного русского литературного языка. 1968. М., Наука.
- Chesterman, A. 1991. On definiteness. A study with special reference to English and Finnish. Cambridge.
- Christian, R. F. 1961. Some consequences of the lack of a definite and indefinite article in Russian. Slavic and East European Journal. Vol. 5 (19), 1–11.
- Davison, R. M. 1967. The use of the genitive in negative constructions. In Studies in the Modern Russian Language. (2), 34–64. Cambridge.
- Givón, T. 1978. Definiteness and referentiality. In J. Greenberg (ed.), Universals of human language, Vol. 4: Syntax, 291–330. Stanford.
- Gladrow, W. 1979. Die Determination des Substantivs im Russischen und Deutschen. Leipzig.
- Jakobson, R. 1936. Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre. (Gesamtbedeutungen der russischen Kasus). Travaux du cercle linguistique de Prague. (6), 240–88.
- Krámský, J. 1972. The article and the concept of definiteness in language. The Hague.
- Raskin, V. 1980. Determination with and without articles. In J. Van der Auwera (ed.), The Semantics of determiners, 124–134. London.
- Restan, P. A. 1960. The objective case in negative clauses in Russian. Scandoslavica. (4), 92–112.

- Schaller, H. W. 1978. Das direkte Objekt in verneinten Sätzen des Russischen. Frankfurt a. M.
- Thomson, A. 1911/12. Beiträge zur Kasuslehre. III. Zur Genetivreaktion des Verbuns im Baltischslavischen. Indogermanische Forschungen. (29), 249–59.
- Timberlake, A. 1975. Hierarchies in the Genitive of Negation. Slavic and East European Journal. Vol. 19, No. 2, 123–138.
- Wexler, P. 1976. On the non-lexical expression of determinedness (with special reference to Russian and Finnish). Studia Linguistica. 30 (1), 34–67.

О выражении значений
определенности-неопределенности
в современном русском языке

Юко ЯАНАГИМАТИ

В статье автор стремится уточнить семантику определенности-неопределенности и механизм ее выражения в современном русском языке.

Значения определенности-неопределенности, которые передаются с помощью артиклей в индоевропейских артиклевых языках, могут выражаться в безартиклевом русском языке различными средствами на различных уровнях. Но способы выражения данных значений нельзя считать произвольными, так как они обусловлены определенными отношениями значений определенности-неопределенности к отдельным грамматическим категориям и к отдельным уровням. В русской грамматике необходимо изучить такие определенные отношения между ними, и такие условия, при которых можно или важно разграничить значения определенности-неопределенности.

В тех конструкциях, в которых важно разграничить значения определенности-неопределенности, относительно регулярно встречаются такие типы именной группы, как вещественные существительные и конкретные существительные во множественном числе. Общим признаком данных типов именной группы, который может считаться релевантным в разграничении значений определенности-неопределенности, является “нецелостность”.

Позиция именной группы в семантико-синтаксической структуре предложения тоже имеет отношение к значениям определенности-неопределенности. В частности, в русском языке явственно выражаются данные значения именной группы в позиции подлежащего, в которой именная группа без местоимений обычно толкуется в качестве “определенной в контексте”.

Рассмотрение механизма выражения значений определенности-неопределенности в современном русском языке выясняет отдельные стороны данных значений. Обращает на себя особое внимание характер “неопределенности”. Можно признать существование разных ее подтипов, среди которых имеется и значения, касающиеся разграничения “степени неопределенности”. Одним из них является значение, выраженное формами множественного числа существительного в конструкциях такого типа, как “у нас новые пассажиры, ~; у меня гости, ~”. Выражение “неопределенности” формами множественного числа такого типа обусловлено характером экзистенциального высказывания, в котором, если указывается определенное число субъекта существования, то он тем самым индивидуализируется. В таком высказывании формы множественного числа существительного без числительного нейтрализуются по количественному признаку, зато выдвигается на первый план их другой признак “нецелостность”, которым пользуются для того, чтобы избежать индивидуализации субъекта.

Учитывая такой характер значения неопределенности, можно утверждать, что по меньшей мере, поскольку вопрос касается значений, выраженных языковыми формами, характер значений определенности-неопределенности нельзя свести к такой теоретической бинарной оппозиции, как “референт идентифицирован или нет”. Скорее, к ним относятся более конкретные, не только коммуникативные, но и когнитивные противопоставления, выражаемые языковыми средствами. Что касается понятий “определенность” и “неопределенность”, то они могут рассматриваться как возможное толкование в результате сочетания каких-либо признаков, выражаемых данными противопоставлениями. (Так, для толкования “определенности”, по меньшей мере требуются два признака: коммуникативный признак “известность в контексте” и когнитивный “целостность”).

В общем, можно сказать, что в русском языке основными признаками, позволяющими выражать значения определенности-неопределенности, являются когнитивные противопоставления. Среди них малоизученным и требующим более тщательного рассмотрения, является противопоставление “целостность/нецелостность”, связанное с значениями категории числа существительного.